



# ハーレム ミストレス

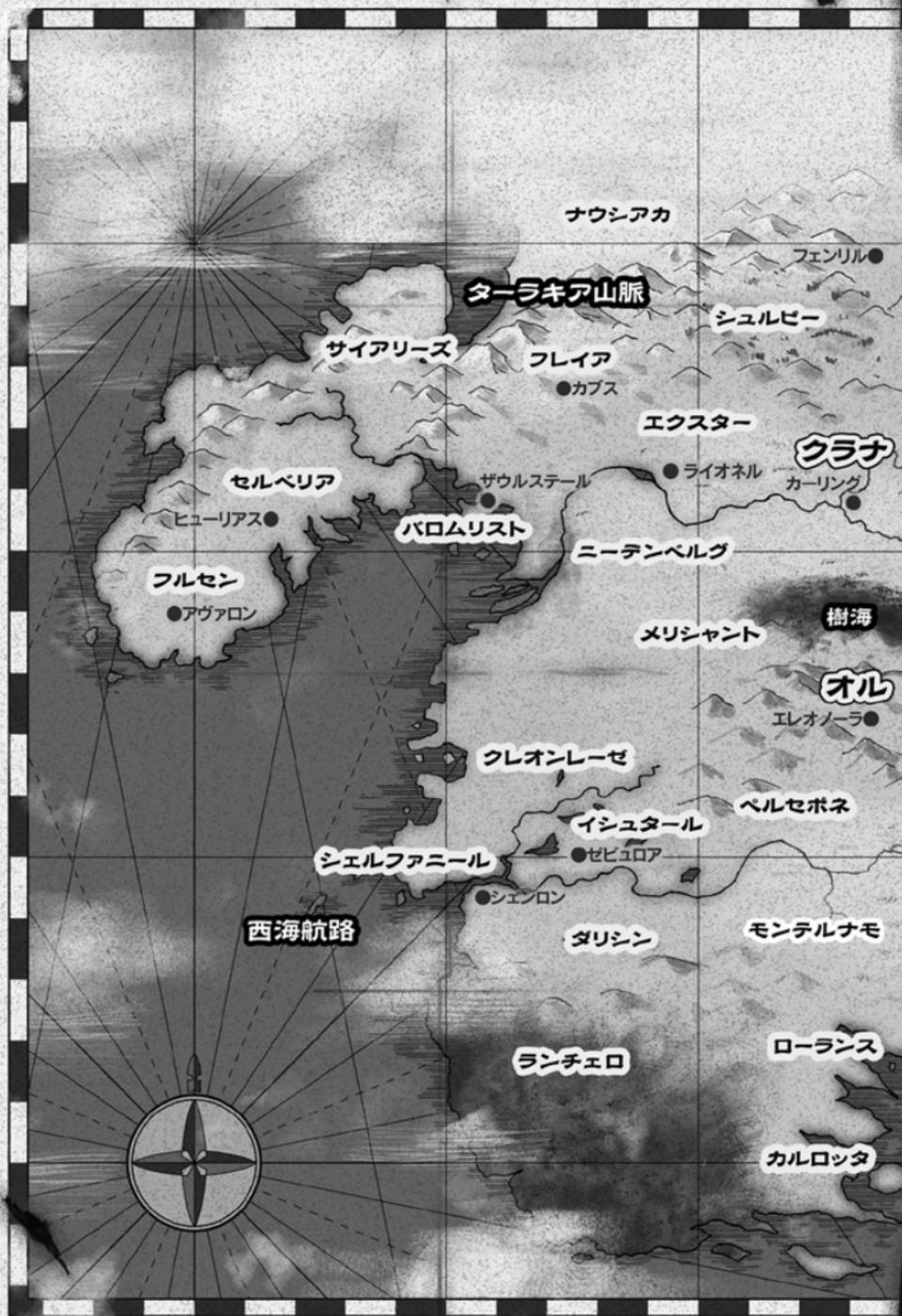
Harem  
Mistress

小説 竹内けん 挿絵 ピラノ

立ち読み版

# ハーレムシリーズの世界





ナウシアカ

ターラキア山脈

サイアリース

フレイア

シュルビー

●フェンリル

●カブス

エクスター

クラナ

セルベリア

ザウルステール

●ライオネル

●ヒューリアス

バロムリスト

●カーリング

フルセン

●アヴァロン

ニーテンベルグ

メリシャント

樹海

オル

●エレオノーラ

クレオンレーゼ

ベルセボネ

シェルファニール

イシュタール

●セビュロア

●シェンロン

西海航路

ダリシン

モンテルナモ

ランチェロ

ローランス

カルロッタ



## 登場人物紹介

Characters



### ユリシカ

オルシーニ王国からサブリーナ王国のユージン領主のもとへ嫁いできた娘。鹿狩りの趣味を持つ。

### ランディ

ユージン領主エレンツォの弟。結婚早々、戦に出てしまった兄の代わりに兄嫁の相手をする。

## ディーヴァ

ランディの従妹。魔法の才能があり、たびたび浮遊魔法で宙に浮いている。



## ヘルミオネ

ランディの義母。ランディやディーヴァを優しく面倒みてくれる淑女。

第一章	美しすぎる兄嫁
第二章	壊れゆく日常
第三章	兄嫁の失態
第四章	痴女と風船娘
第五章	裏切りの代償
第六章	悲劇の未亡人



さすがはロンドバルド晩年の寵姫だ。後ろ姿からも零れるような色香である。しかし、そんな華やかな外見とは裏腹に、非常に家庭的な女性だ。趣味は家事と裁縫であり。こうやって料理をする姿も実に楽しげである。

(義姉上が言う通り、なんでこの人は再婚しないでこの家に留まっているんだらう?)

幼少のころから、八十過ぎの老王の寵姫となり、二十歳を過ぎてから、四十過ぎの寡男やまおに下賜されたが、その新しい夫もまた一年も経たずして、戦死してしまった。

彼女が、ロンドバルドやヘクトルに愛情を持つていたとは思えないが、二人の夫に大量の遺産を分け与えられ、悠々自適な生活を送れるはずなのに、この屋敷に留まり、嬉々として母親役の苦勞うらみをしている理由がわからない。

まるで誘蛾灯ゆうがとうのように匂い立つ女性の後ろ姿を観察しながら、ランデイが取り留めもないことを考えていると、料理をしながらヘルミオネが声をかけてきた。

「ランデイ君って、ユリシカさんのこと好きなの？」

「な、何をバカなことをっ」

やましい気持ちのあつたランデイは、ドキッとした拍子に、不自然なほどに強く否定してしまつた。

ヘルミオネは料理を続けながら軽く続ける。

「ならいいけど、ユリシカさんは、お兄さんのお嫁さんなのよ。それを忘れてはダメよ」  
「当然です。言われるまでもありません」

ランディはきつぱりと否定した。しかし、ヘルミオネはさらに続ける。

「ユリシカさんって魅力的でしょ。その……間違いが起きないか心配で……。二人とも若い男と女なんだし。万が一ってことも。だから、あんまり二人つきりでああいうことをするのは感心しないわ」

やんわりと注意されたランディだが、カチンときた。攻撃的な気分になり、ヘルミオネのすぐ後ろに立つ。

「義母さんがそんなこと言えた立場ですか？ 一年前のあの風呂場のこと、僕は忘れたことはありませんよ」

「っ!？」

ビクッとヘルミオネの背中が震えた。

不意に激情を抑えがなくなったランディは、突如としてヘルミオネの背後から抱きしめていた。

まるで彫像のように硬直しているヘルミオネの甘い大人の体臭が、少年の鼻腔を刺激した。たまらなくなったランディは、豊かな金色の髪に顔を突っ込む。

「義母上は、なぜこの家に残っているんですか？」

「……やっぱりわたくしのことが目障り……」

義理の息子に抱きしめられて、継母は悲しそうな声色を出す。

「ごめんなさい。そういう意味ではありません。義母さんがいてくれてとても助かってい

ます。いつも美味しい料理を食べさせてくれるし、僕やディーヴァにも優しくしてくれる。でも、義母さんは先王陛下からも親父からも十分な遺産をもらったでしょ。再婚していくらでも幸せになれるのに、この家に留まって、そんな侍女紛いのことをしているのが不思議で仕方ないんです……」

「ランディ君たちのことを放っておけなかった。じゃダメなの？」

「ええ、そんな理由じゃとても納得できません」

ランディがいつになくきつく絡むので、ヘルミオネは寂しげに笑った。

「人には生き甲斐が必要だわ。……わたくしね。昔から、どこにも居場所がない女だったの。サブリナ王家でも厄介者だったし、ここユージンにきても、みんな腫れ物を扱うようだったでしょ。そんな中でランディ君や、ディーヴァちゃんは、わたくしのことを本当によくしてくれた。だから、わたくしも二人の母親代わりとして、その成長を見守るのを生き甲斐にしたいと思ったの」

「綺麗事を言わないでくださいっ!!」

抑えがたい破壊衝動を止めかねたランディは、両手でヘルミオネの若草色の衣装の上から双乳を鷲掴みにした。そして、それを力任せに揉みしだきながら、尻の谷間にゴリゴリと硬いものを押し付ける。

「義母さんは、僕に欲情しているんだ。だから、義姉さんとのことを嫉妬して絡んできている。違いますか？」

「そんな、どうしたの、突然っ!？」

いきなり狼となった義理の息子に乳房を揉みしだかれて、ヘルミオネは慌てて、流し台にしがみつく。

「義母上だつて、こうされたかつたんでしょ。いつも僕に色目を使っていた。僕と義姉さんのことに気づいていて、一線を越えそうになつたから邪魔をした。違いますか？」

「あんゝ そんなに強く揉んだら……ダメよおゝ」

か弱いヘルミオネなりに必死に抵抗しようとするが、背後から襲われては逃げようがない。

「義母さんは勘違いしている。僕は義母さんのことを継母だなんて思ったことは一度もありません。いつも女として見ていました。こんな色っぽい女性がこの世にいるのかって驚きとともに、エッチしたいって思っていました」

「こんなオバサンをからかつちゃダメよ」

義理の息子に熱烈に言い寄られて、ヘルミオネは困惑しているようだが、ここまできたらランディも止められない。

「二十四歳つて、普通に適齢期でしょ」

その上出産経験もなしでは、その辺にいるお姉さんとなんら変わらない。

「でも、お館様が……」

「親父だつて、死後まで若い妻に貞操を守ることを強要するほど器量の小さな男ではあり

ません。いま義母さんは自由の身です。義姉さんは兄上のもものだけど、いまの義母さんはだれのものでもない。なら僕がもらってもいいはずですよ」

義理の親子という関係が見えない壁となつて立ちふさがり、その後の発展を妨げてきた。しかし、今日、ユリシカとのことを嫉妬されたことで、ランディの中の自制心が切れた。

「わかつたわ。わかつたから、ちよつと、ちよつと待つて」

「義母上っ！」

この期に及んでなおも躊躇うヘルミオネに、ランディは苛立つ。

「違うの。わたくしは逃げないから、ちよつと待つて、このままじゃ服がダメになつちゃうわ」

「えっ？」

戸惑う童貞少年を前に、すでに二人の男を知っている未亡人は首の後ろを指し示した。

「まずはそこにあるボタンを外して」

「……はい」

虚を突かれたランディは言われるままに、ヘルミオネの首の後ろにあったボタンを三つ外した。

そして、滑らかな両肩を露出させ、若草色のブラジャーに包まれた胸元をあらわとする。するとヘルミオネは、自分からブラジャーを外した。

ぶるんつと巨大な白い双乳がまろび出る。

「さあ、どうぞ。ランディ君の好きにしていいわよ。母親のおっぱいは、子供が好きにする権利があるんだから」

「あ、はい……」

いささか気圧されながらも、ランディは再び両手を乳房に回した。

(やっぱり、生だど蕩けるような揉み心地だ)

興奮したランディが、乳白色の肌にピンクの指の跡が残るほど夢中になって揉みしだいていると、ヘルミオネの手がそつと添えられた。

「強すぎよ。女の身体はデリケートなんだから、優しく扱わないとね。こうするの」

ヘルミオネの言う通りに揉んでいると、乳房全体の張りが増し、乳首が突起してくるのがわかった。

「ここ、抓んで」

「こ、こうですか……」

当初の勢いはどこへやら、ランディはヘルミオネに操られるがままに動いてしまう。当然、両の乳首も、それぞれ親指と人差し指で抓んだ。

「ああ、上手〜上手、気持ちいいわ。いまランディ君は、ユリシカさんに下着姿で抱きつかれて、我を失っているのよ。あんなことされたら若い男の子が自制できなくなつて当然よね」

「義母さん……」

それぞれの乳首を、まるで男がオナニーするかのよう<sup>に</sup>に激しく扱<sup>じ</sup>かれたヘルミオネは、陶酔した表情で喘ぎ始める。

その姿を見たら、ランディは我慢できなくなつた。

(このままじゃ、何もしなくても出ちまう。一刻も早く入れたい)

下半身の暴れん坊の意思を無視しかねたランディは、名残惜しいが乳房から手を離し、ロングスカートを豪快にたくし上げた。

「キャ！」

ヘルミオネは驚いた悲鳴を上げる。

夏だったこともあつて、ヘルミオネの下半身の守りは薄かつた。ただむつちりとしたお尻に、小さな若草色のショーツがあるだけである。

「すみません。もう我慢できません。入れていいですよね」

「ええ、ランディ君の好きにしていいわ」

許可をもらつたランディは、ショーツの両側に手をかけて強引に引きずり下ろす。足首まで達したところで、ヘルミオネは両足を交互に上げて脱がすことに協力してくれた。

むつちりとしたハート型をした白いお尻。まさに女の尻といった感じがする。

尻<sup>しりたぶ</sup>朶<sup>たぶ</sup>に両手をかけて左右に割ると、まず藤色をした肛門が見えた。こんな淑女にも肛門があるのか、と驚きながら目を凝らすと、その奥に黄金の陰毛に覆われた肉割れを発見した。

(よし、あそこに入ればいいんだな)

目標を確認したランディはズボンとショーツを脱ぎ捨てた。そして、いまや遅しといきり立つ肉刀を構える。

びっくん、びっくん、びっくんと脈打ち、先走りの液体を垂れ流す肉刀。いまなら鉄でも貫けそうな気分だ。

台所に上半身を預けているヘルミオネのむっちりとした尻を両手で掴んだランディは、肉刀を肉割れに添えた。

「それじゃ、入れますよ。義母さん」

「ええ、どうぞ」

しつとりとした母親に許可をもらったランディは、欲望のままに突撃した。しかし、ズルっ。

肉棒は、亀裂の表面を浅く滑っただけだった。

(あれ?)

戸惑ったランディは慌てて再挑戦したが、亀頭が濡れた肉割れを滑るだけで一向に中に入らない。

(ど、どうしたんだ!? ここに入れるんじゃないのか? セックスって……)

童貞少年が焦りまくっていると、未亡人は自ら肉割れに指をかけ、左右に豪快に割ってみせた。

「もう強引なんだから。焦らないで、ここよ、ここに入れるの……」

肉割れが開き、中から内臓のように赤い媚肉が姿を現した。そのあまりの生々しい光景に驚いたランディだが、とにかくもヘルミオネの指し示した肉壺に龟头部をあてがう。

「そう、そのまま入れるのよ、あぁ♪」

「くう……っ」

ズブ、ズブズブズブ……。

硬い肉棒が、成熟した女の腔洞に飲み込まれていく。そして、根元まで入れることに成功した。

「ああ、ごめんなさい。いきなりだったから、中まで濡れてなくて、あんまり気持ちよくないですよ」

「そんなことないです。温かくて、ザラザラ、すげえ、気持ちいい。これがオマ○コの中か。義母さんのオマ○コなんですわね！」

初体験。それも美しすぎる義母を貫いたことで、ランディの興奮は否応なく最高潮に達していた。

じっとしていることができず、ヘルミオネの腰を掴まえたランディは、牡としての本能の赴くままに夢中になって腰を使い始めた。

「ああ、性急ね、あん、あん……これが若さ……」

ヘルミオネの口から魅惑的な喘ぎ声が聞こえてきた。初めて聞く牝の吐息にランディの

興奮は高まる。

(これが義母のオマ○コ。ロンドバルド陛下が晩年の宝とし、親父も夢中になったダルス  
タール随一の美女か)

腔洞の良し悪しなど、初体験のランディにわかるはずもないが、これに溺れる男の気持ち  
ちはわかれると思った。

グチヨグチヨグチヨ……。

当初はそれほどでもなかったと思うのだが、抽送しているうちに中から熱い液体が大量  
に溢れてきて、それが潤滑油となって動きを滑らかにした。

しかし、つつい過去男のことがちらつき、言わずもがなの質問をしてしまう。

「親父が死んでからだから、かれこれ二年ぶりぐらいですか？ お望み通り若いちんぽを  
食らった気分はどうですか？」

「意地悪なこと言わないで、わたくしはランディ君のちんぽが欲しかったの！ わたくし  
は初めて、自分から欲しいと思った男にやられているの」

その義母の嬉しすぎる告白に、ランディはいやが上にも燃え上がる。

ヘルミオネの過去の男たちに負けてなるものか、という対抗心も剥きだしに力の限り腰  
を使った。

パチン！。ピチン！。パチン！。

「ああ、ああ、ああ……硬い！。これがランディ君のおちんちなんだ。ああ、こんな硬

いちんぼでゴリゴリやられたの初めてえええ!!!」

老いた男たちのねっとりとした技量によつて開発されてきたであろう淑女の肉体が、若い牡の先鋭的な動きによつて追い詰められていく。

(くうくう)、義母さんのオマ○コつてやつぱり名器というものではないだろうか？ ちんぼが溶ける。消化されそう。も、もうダメだ)

ランディとしては精いっぱい我慢したつもりだったが、実際の時間としてはそう長くはなかつたであろう。

「ああ、すごい！ ビクンビクンしている♪ ビクンビクンしているのおお♪」

これが普段は大人しく清楚な淑女とは思えない。女とは男根を入れられるとこんなにも人格が変わるものなのか。初めて聞く牝の嘶いなきに驚きながらランディは果てた。

「すいません。もう、でます……うくっ」

ドビュビュビュビュビュビュ!!!

義母の胎内に押し込まれた逸物は、暴れ回りながら熱い牡汁をまき散らした。

「あああああああああツツツ!!!」

義理の息子に強引に犯されたヘルミオネは、ぐったりと脱力して流し台に身を預ける。

溜まりに溜まった欲望を吐き出したことで、逸物は小さくなって膣内から抜け落ち、栓を失った女体からは、ドブドブと白い液体が溢れ返った。

男に犯された痕跡そのままの卑猥な女体を見下ろしながら、ランディは息を飲む。



(義母上とやってしまった。一時の激情に駆られてなんてことを……)

取り返しのつかない事態を前に茫然としてみると、ヘルミオネは溜息混じりに呟いた。

「すごい、いっぱい……溜まつていたのね。こんなに熱くて凄いや、出されたの初めて……」

「すみません……」

義理の母親を押し倒すという人倫にもとる行為に、ランデイが打ちひしがれていると、ヘルミオネは身を起こし、向きを変えた。そして、義理の息子の頬を抱きしめると、唇を重ねる。

茫然としているうちに接吻せつぶんが終わった。

「は、義母上……」

「もうこんなところで襲つちやダメよ。料理ができないでしょ。みんなお腹うぶさせているのよ」

「はい」

母親に諭さとされた子供そのままに、ランデイはショボンと項垂うぶだれる。

「ランデイ君は若いんだし、我慢できないときがあつて、当然だと思つて。特にユリシカさんみたいな魅力的な女性と一緒にいたら、たまたまなくなるときがあるでしょう。そういうときは、いつでもわたくしの部屋に忍んでらっしゃい」

「え……」

戸惑うランディの前にしゃがみ込んだユリシカは、精液と愛液でドロドロになっている逸物をそつと頬張り、舐め清めてくれた。

「ランディ君はユージン家の柱となる人。きっとエレンツォ様が、ランディ君に相応しいお嫁さんを探してきてくれるわ。もしかしたら、どこかの貴族の婿養子にいくかもしれない。だから、いくら魅力的でもユリシカさんに手を出したらダメ。それは身の破滅よ。だから、わたくしが母親として、ランディ君のこのヤンチャ坊やの面倒もしっかり見てあげるわ」

この日を境に、ランディは毎晩、こつそりと義母の寝室に通うようになった。

「ディーヴァちゃん。ランディのこと好きでしょ？」

「うん、好き」

その返答は極めて軽い。その好きは、純粹に親愛の情からであろう。

ユリシカは大いに頷いた。

「わたしも、好きよ。わたしはランディのことが好きだから、いっぱいご奉仕したいの。ディーヴァちゃんも一緒にご奉仕しましょう」

「ご奉仕？」

聞きなれない言葉に、ディーヴァは再び小首を傾げる。

「極めて親しい関係にある男と女がする遊びよ。ディーヴァちゃんも参加する資格があるわ。やり方はわたしが教えてあげるから、マネをするといいわ」

ディーヴァを横目に見ながらにつこり笑ったユリシカは、逸物の右側面をペロペロと舐め始める。そして、いったん口を離して促した。

「ほら、ディーヴァちゃんもやってごらんなさい」

「う、うん……」

ユリシカに促されたディーヴァは戸惑った顔で、ランディの顔を見る。

ディーヴァは本当にまだ性知識がないのだろう。男性器を口に咥くわえることに嫌悪感があるようだ。しかし、領民に尊敬されている義姉が率先していることだ。そうそう変なことではないのかもしれない、と判断がつかずに困っているようである。

あともう一押ししろ。とユリシカが真顔で促してくる。

ユリシカの口車に乗って騙すのは心苦しいが、ここは乗るしかない。覚悟を決めたラン  
デイも促した。

「やってみな」

「わかった。あたしもやってみる」

ディーヴァは、ユリシカとは逸物を挟んで反対側に跪いた。そして、柔らかい丸顔を逸物に近づける。

「ランデイおにいちちゃんのここ、いつもと違って大きい。なんかピキピキしている……」  
ランデイとディーヴァは子供のころから実の兄妹よりも仲がよく、風呂にも何度も一緒に入ってきた仲だ。

当然、互いの裸体は見慣れている。従兄の逸物も見慣れていただろう。

しかし、臍近くまで反り返った状態を見たのは初めてに違いない。

その意味するところはわからなくとも、女としての本能が卑猥なものを感じさせるのか、  
ディーヴァの顔が赤く紅潮していた。

「ええ、カッコイイでしょ。これが本当のおちんちんよ」

ユリシカに優しく促され流されたディーヴァは、熱病にでも浮かされているかのように、  
逸物の左側面から顔を近づけると、小さな口元からピンク色の舌を差し出した。

唾液に濡れたその小さな桃色の肉片が、ペロリと龟头部を舐める。

ピクッ!

両親を失い、自分に絶対の信頼を寄せてくれている少女を裏切る行為に、ランディの心が震えた。

「そう、上手よ」

黒い笑みを浮かべているユリシカは、童女を褒め称えた。そして、自らもまた率先して、右側から逸物に顔を近づけた。

「さあ、手本を見せてあげる。わたしのマネをするのよ」

ユリシカは唾液の乗った舌尖で、レロレロと卑しく亀頭部を舐め回す。

それをディーヴァも見習った。小さな舌を懸命に、亀頭部に絡ませる。

右側からユリシカの舌、左側からディーヴァの舌が、亀頭を交互に這い回った。

「うふふ、ディーヴァちゃんってほんと素直でかわいいわ。こんな娘がわたしも欲しい♪」  
愛らしい義妹の顔を愛しそうに眺めていたユリシカは、不意にディーヴァの後頭部を押さえたかと思うと、自らは口を大きく開けた。

そして、亀頭部を挟んだまま、ディーヴァの唇まで奪う。

「っ!」

ディーヴァは目を白黒させるが、後頭部を押さえられているから逃げられない。それをいいことに、ユリシカは亀頭部を挟んだまま、義妹と濃厚な接吻をする。

「ぷちゅ、ムチュムチュムチュ……」

卑猥な水音を立てながら女たちの口内で、舌が絡み合い、亀頭部を弄ぶ。

女たちの口元からはダラダラと涎が垂れ、顎を汚し、滴となって大地に滴った。

(義姉上、純真なディーヴァになんてことさせるんだ……)

なにも知らない従妹にしゃぶられて罪悪感を覚えるのに、どうしようもなく興奮してしまふのも事実だ。

「ぷはっ」

亀頭部を挟んでの女同士のディーブキスを存分に楽しんだユリシカは、ようやく口を離した。

二人は同時に大きく息を吸う。

どうやら、ディーヴァの方はずっと息を止めていたらしい。荒い呼吸を繰り返す少女に向かつて、ユリシカは横目でランディの顔を見るように促す。

「どお、ディーヴァちゃん。見てごらんさい。あなたの大好きなお義兄様が、とつても気持ちよさそうな顔をしているでしょ。いままでこんな表情見たことはあった？」

ディーヴァはじつと義兄の顔を見た。その純真な眼差しで見つめられていると、なんともばつが悪いが、逃げるわけにもいかない。

ランディが必死に耐えていると、やがてディーヴァは納得顔で頷く。

「うん、ない。ランディおにいちゃん、凄気持ちよさそう♪」

「でしょ。これが大人の男と女の遊びよ。女は好きな男の子には、こうやって奉仕するも

のなのよ」

「うん、ディーヴァもいっぱいご奉仕する」

自分がやっていることが正しいのだ、という確信を持たせたのか、ディーヴァは元気よく頷いた。

義妹の籠絡成功を確信したユリシカもまた、満足げに頷く。

「うふふ、気に入ってくれてよかったわ。さあ、続けましょう」

「うん。あたし、ランディおにいちゃん大好きだから頑張るよ」

ユリシカとディーヴァは二人で逸物を手に取った。そして、再び亀頭に接吻。ディーヴァもそれに倣った。

今度は後頭部を押さえていないのに、ディーヴァは積極的に、自らユリシカとの接吻をし、その間に肉棒を挟もうとする。

「どお、おちんちん美味しいですよ。女はこれを知ったらやめられなくなっちゃうわよ」

「うん、おにいちゃんのおちんちん美味しいねよ」

ディーヴァの無邪気な答えに、ユリシカは目を細める。

「いい子ね。でも、舐めるのはわたしと一緒にのときだけよ。それからこのことをだれにも知られてはいけないわ。これは愛し合っている男女だけが、こっそりと楽しむ秘密の遊びなんだからね」

「うん、わかった」

ディーヴァは元気に頷いた。

(ああ、なにも知らないディーヴァが、どんどん丸め込まれていく)

優しいお姉さんを演じながら、とことんまでディーヴァを利用しようとしているユリシカのもくろみが読めるだけに、ランディは頭を抱えたくなつた。しかし、わかつていて止めることのできない立場だ。

意気投合した義理の姉妹は、肉棒を啜えたまま、少しずつ根元へと下りていく。そして、肉袋にまで達した。

「ディーヴァちゃん。歯を立てたらダメよ。そこはキンタマといって男の子最大の急所よ。どんなに凄い勇者だつて、ここを噛み切られたら、おしまいよ。その最大の急所を任せられるというのは、女が男の信頼を勝ち得ている証よ。だから、ペロペロと舐めるだけにしておきなさい」

「うん……、わかった。おにいちゃんのキンタマ舐める♪」

黒すぎる妖女となつたユリシカは右の睾丸を、純真すぎる魔女ディーヴァは左の睾丸を口内に含む。そして二人はランディの顔を見上げながら、ペロペロと睾丸を舐めてくる。

不意にランディは、いま自分がどういふ顔をしているのか、不安になつた。

(たぶん、締まりのない顔をしているんだらうけど……)

襲い来る快感と羞恥。そして、罪悪心に耐えていると、心行くまで睾丸を舐めしやぶつたユリシカは、さらに舐め下りた。

それにディーヴァも慌てて従う。

二人は男の縫い目を舐めながらランディの股の間を通って、後ろに回った。

「ちよ、ちよつと義姉上……」

「あなたは黙ってわたしたちの奉仕を受けなさい」

「受けなさい」

慌てるランディをユリシカが窘め、ディーヴァもまたなぜか楽しげな声で復唱する。

かくして義理の姉妹は、仲良く交互に肛門まで舐めた。

「あ、ああ……」

もつとも汚い穴を、だれよりも優先して守らねばならない大事な義姉妹に舐められると、申し訳ない気持ちでいっぱいになるのに、同時にゾクゾクするような快感がランディの背筋を駆け上がり、たまらず恥辱と快感の混じった呻き声を漏らしてしまった。

その様に淫らな笑みを浮かべたユリシカは、ディーヴァに質問する。

「どお、好きな男の子が、自分のご奉仕で喜んでいる様を見ると、こう胸があつたかくなつて、幸せな気分になるでしょ」

「うん、気持ちいい。おにいちゃんに、こういう顔してもらえると、凄く嬉しい」

「ディーヴァちゃんも、もうすつかり女ね。それじゃ、そろそろトドメといきましょう」

再び股の間をくぐって男の前に膝立ちになったユリシカは、自らの乳房を両手で持ち上げると、いきり立ち先走りの液を垂れ流す逸物を挟んだ。

それに続こうとディーヴァも衣装の胸元を開こうとしたが、ユリシカと自らの乳房の違いを見て硬直する。

ユリシカの芸術的なまでに整い膨らんだ乳房と比べるのも哀れな、ほんの少ししか膨らんでいない乳房である。これではとてもではないが、同じように挟むことは不可能だ。

どうしたものか、と動揺する義妹を、ユリシカは優しく宥める。

「おっぱいはそのうち嫌でも大きくなるわ。いまは先っぽを舐めてあげて」  
「うん」

少し残念そうな表情を浮かべたディーヴァだが、白い胸の谷間から飛び出した赤黒い龟头部に顔を近づけると、ペロペロと舐め始めた。

「うくっ」

ユリシカのパイズリと、ディーヴァの龟头舐めのダブル攻撃にランディは追い詰められた。

その上、ディーヴァは何を思ったか、ユリシカの乳头までペロペロと舐めているようだ。

「ああ、ディーヴァちゃんったらあ♪」

「えへへ、ユリシカおねえちゃんが感じている表情も、あたし好きだよ」

ディーヴァの悪戯っぽい答えに、ユリシカは目を丸くし、そして笑った。

「うふふ、ありがとう♪」

当初はユリシカが一方的に騙していた雰囲気だったが、いつの間にか義姉妹は意気投合

してしまったようである。

ユリシカは自らの双乳を上下させて、肉棒を弄び。その上からディーヴァが尿道口をチロチロと舐めている。

快感ももちろんだが、その光景の淫らさにランディは追い詰められた。

「くっ、もうダメだ。でる……」

ランディの眩きの意味がわからなかったのか、ディーヴァは意味を問いたげな顔を上げた。

その拍子に、温かい乳肉に包まれている男根の中を熱い液体が駆け抜ける。

ドビユ、ドビユユユユユ!!!

「……っ!!」

白濁液が盛大に噴き出し、仰天顔のディーヴァの鼻先から、ユリシカの美乳に浴びせられる。

(やっちゃまった……)

以前、風呂に入っているとき、ヘルミオネの悪戯から彼女の背中に精液を浴びせてしまったことがあるが、今度は顔に浴びせてしまった。

精液塗れの少女の顔を見てみると、罪悪感とともに妙な独占欲を刺激される。

ほどなく射精が終わるとディーヴァが恐る恐る質問してきた。

「これって、おしっこ?」



それをユリシカが優しく訂正する。

「違うわ。ザーメンといって、男の子の愛の証よ。こんなにかけてもらえるなんて、ディーヴァちゃん愛されているわね」

「えへへ♪」

なんだか意味はわからないが、褒められて嬉しいのだろう。ディーヴァは照れ笑いを浮かべる。

その童顔にかかった精液を指で拭ってやったユリシカは、自らの乳房にかかった精液とともに全身に手を這わせ始める。

白濁液がみるみるうちに美しい肢体に引き伸ばされていく光景にディーヴァが戸惑う。

「ユリシカおねえちゃん、何をやっているの？」

「ランディの精液を体中に塗り広げているのよ。好きな男の匂いに包まれるのって幸せなの」

「あたしもする」

尊敬する義姉のマネを慌ててしようとする少女を、ユリシカは窘めた。

「ディーヴァちゃんはこのんことをする必要はないわ。意地悪なランディはわたしには絶対してくれないけれど、女のもつとも欲しい場所に、直接浴びせてもらえばいいのよ」

「女のもつとも欲しい場所？」

首を傾げるディーヴァの耳元で、ユリシカは悪魔のように囁く。

「そう、オマ○コの中にね」

無垢な少女を、墮落させようとする義姉の所業に、ランディは声を荒らげる。

「義姉上っ！ 何を言っているんですか!!」

しかし、ユリシカは平然と応じる。

「何か問題があつて？ ディーヴァちゃんは独身よ。従兄妹なら、セックスしたつて、結婚したつていいのよ。それともディーヴァちゃんまで、わたしと同じように生殺しにするつもり？」

「そ、それは……」

全身の柔肌に、精液を薄く伸ばして塗りたくる欲求不満の処女夫人に睨まれてランディは絶句する。

その姿を横目に見つつ、ユリシカは夫の従妹に質問した。

「ディーヴァちゃんは欲しくない？ ランディの硬いおちんちんを、オマ○コの中に入れてもらうの。そして、さつき出た白い液体を、子宮に向かってビュウビュウかけてもらうの」

「え、おにいちゃんのおちんちんを、ディーヴァのオマ○コに入れるの？」

驚いたディーヴァは、自らの股間のあたりを押さえる。

どうやら、本当にまだセックスの意味がわかっていないようだ。

ランディの心は罪悪感にチクチクと痛んだが、同性ゆえの気軽さなのかユリシカはまっ

たく頓着せずに促す。

「そうよ。その穴に、あのカチカチに硬いおちんちんを入れてもらうことこそ、女の最高の幸せなの。ほら、早くパンツを脱ぎなさい」

ディーヴァの背後に回ったユリシカは、ピンク色のミニスカートをたくし上げた。あらわとなったのは白地にピンクの横線の入った縞パンだ。そのまたぐり部分にはすでに外側からも見て取れるほどの大きな沁みがあった。

それにユリシカとランディは同時に気づく。

息を飲むランディに、ユリシカは意味ありげに頷いた後、ピアノを弾く細長い指先が、股間を捕らえた。

「ここ疼いているでしょ？」

「あう、そこダメ、おしっこ出そう……」

魔法の箒に跨がって、失禁してしまった体験を思い出したのか、ディーヴァは恥ずかしそうに耳まで真っ赤にして震える。

「大丈夫よ。わたしに任せておきなさい」

耳元で優しく囁いたユリシカは、ショーツの両端に指をかけた。

ユリシカを信頼しているディーヴァは震えながらも逃げようとはしない。

純真な少女が、痴女に汚されていく光景を見て、ランディは心が痛んだが、同時に目を逸らせない。

不意にユリシカの黒い目が、ランディの瞳と正対した。

あなたの考えていることなんて、全部お見通しよ、と言いたげな笑みを浮かべた義姉は、スーツと縞パンを引きずり下ろす。

股布と中身の間に、ヌラーと粘着力の強い液体の糸を引きながら、ショーツは脱がされた。

「う……、恥ずかしいよお……」

子供のころから風呂にもよく一緒に入っている仲だ。ランディに裸を見られたからといって、恥ずかしがったことは一度もない。

しかし、まるで失禁したかのように濡れた下半身を晒したとんがり帽子の少女は、恥ずかしくそうに内腿をモジモジとさせた。

「恥ずかしがることはないわ。ディーヴァちゃんは、好きな男性のおちんちんをしゃぶつたのよ。こうなつて当然よ。さあ、足を開いて、仰向けになりましょう」

ディーヴァを背後から抱きしめたユリシカは、そのまま仰向けに倒れた。そして、二人して同時に股を開く。

成人した女性と、未熟な少女。いずれも処女の陰唇が縦に二つ並んだ。

つややかな黒い陰毛がもつさりと生えているユリシカとは対照的に、ディーヴァはつるつるの恥丘である。

(陰毛もまだ生えていないんだよなあ……)

「兄上の死は悲しいけど、義姉上。いやユリシカと一緒になら、ユージン家を守っていけると思う。僕と結婚してください」

プロポーズをしながら、ランディは喪服の胸元をはだけさせにかかる。それと悟ったユリシカは必死に抵抗しようとした。

しかし、背後から抱きしめられてしまった時点で、女の負けである。

この体勢から逃げるのは至難の業だ。逆に男から見れば触りたい放題である。

「やめて。わたしはもう、そんなことするつもりはないの……。余生は出家して、エレンツォ様の御霊に祈って過ごすわ」

「ダメです。そんなこと、だれも望みません。僕も許しません」

喪服の胸元をはだけさせ、黒いブラジャーに包まれた双乳があらわとなった。その邪魔な黒布の狭間に無理やり手を入れたランディは、強引に揉みしだく。

「お願い。もうこんなことやめましょう。わたしをこれ以上、辱めないで」

ユリシカは涙ながらに訴えるが、義弟は聞く耳持たない。

「どうしてですか？ いままでも散々やってきたことでしょう」

黒いブラジャーがあらわとなった。それを引きずり下ろす。

剥きだしとなった白い両の乳房を、それぞれの掌に包み込むと、ランディはタプリタプリと下から持ち上げるようにして揉みしだく。

「ああ、だめ、わたしはもうこういうことをする資格がないの。してはいけない女なのよ」

罪悪感に苛まれる女の想いとは裏腹に、乳房を男に無理やり揉みしだかかっていると、桜色の乳首が隆起してくる。

「ほら、もう乳首勃つてきた。こんなエロエロな身体を持って出家されたのでは、尼寺の方でも迷惑ですよ」

コリコリに勃起した桜色の乳首を抓んだランディは、キュッキュッと扱いてやる。

「あ、ダメ、やめて……なんで、わたしはこんなに……」

世を侮み、罪の意識から出家しようという心に偽りはなくとも、女盛りの身体が男の愛撫に應えてしまう。嘆きの声とともに、口唇からは熱い吐息が漏れる。

「ユリシカは忘れてしまったんですか？ この身体がいかにエロエロなド淫乱であるか？ 忘れてしまったと言うなら、思い出させてあげますよ。ほら、ちようどいい具合に、姿見がある。自分の正体をよく見て認識してください」

ユリシカの身体を背後から抱きしめているランディは、ベッドのすぐ近くにある姿見の方を向き、彼女をM字開脚にした。

「ああ、やめて……」

涙にくれる喪服の未亡人の黒いスカートをたくし上げる。

黒いパンストに包まれた美脚。その下には黒いショーツが穿かれていた。

反射的に膝を閉じようとするユリシカの太腿を強引に掴まえ、大股開きになった股間部分を鏡によく映るようにしてやる。

「ほら、どうですか？ 嫌だ、嫌だと駄々を捏ねているわりには、もう沁みができているじゃありませんか」

パンスト越しにもわかる。指摘の通り、ユリシカの股間には小さな沁みがポツンとできていた。

そこに右手の中指を添えたランディは、グリグリと押してやる。沁みはたちまちに大きくなってしまふ。

「ああ、もうやめて、こんなことはもう……」

「この身体のこととは、だれよりも僕が一番よく知っているんです。ユリシカ以上にね」

怯えるユリシカの耳元でねちちこく囁いたランディは、パンストの沁みのできている部分に爪を立て、穴を空けた。ビリビリとその穴を大きくしていく。

ランディは自らの昂りを、ユリシカの背中に押し付けながら、その耳元で囁き続ける。

「ユリシカをイカすのなんて、簡単なんです。クリトリスを下から上へと持ち上げるようにして、左右に捏ね回せばいい。そうすればあつという間に、熱い汁をダラダラと垂れ流しながらイってしまう。このピンピンの乳首を強くしゃぶってやればそれだけでも、あつさりいく。膣のお腹側の浅いところ、ぷっくりと膨らむところをコリコリと弄ってやれば、おしっこを漏らしながらイきますよ。ああ、アナルも好きですよ。特にアナルとヴァギナに同時に指を入れて、間の肉壁を、きゅつと抓んでやれば、理性なんて簡単にぶつとびます。恥も外聞もなくチンポ欲しいと騒ぎたてるようになる。そして、本当にちんぽ

をぶち込まれて、子宮口を突かれれば、狂ったように自ら腰を振り始める。それがユリシカという女性です。違いますか？」

「……」

身に沁みた実体験があるだけに、義弟との不埒ふらちな関係に溺れてしまった淑女は反論ができずに押し黙る。

それを肯定と受け取ったランディは、ユリシカの身体をうつ伏せに押し倒した。

「こんなエロエロな身体を持って落飾の後家なんて務まりませんよ」

うつ伏せになって尻だけ高く掲げられたユリシカのまたぐり部分には穴が空き、黒いシヨーツが露出していた。脱がすのは面倒だと感じたランディは、シヨーツだけを持って、左に移動させた。

すると予想通り、黒い陰毛は寝て、しつとりと濡れていた。

「言葉で辱められただけで、もうグチョグチョですよ。さすが淫乱女のおマ○コは違う」  
気高き未亡人の自尊心を徹底的に踏みにじりながら、ランディはズボンの中から、いきり立つ逸物を取り出した。そして、濡れた陰唇に添える。

「ダメ、それだけはダメ……。お願い許して。もうやりたくないの。エッチなことは生涯しない」

「いまさら何を言っているんですか？ ユリシカはこれが好きだっていつも言っていたでしょ」

再び必死に暴れ出したユリシカの両腕を掴んだランディは、左右に広げさせて背後から持ち上げた。

「第一、ユリシカをこんなエッチな女に育て上げたのはだれですか？」

「……っ」

両腕を強く握られてユリシカは悔しそうに唇を噛み、顔を背ける。

「ユリシカのオマ○コは、僕のおちんちんと相性がピッタリなんですよ。兄上のもんじゃない。僕のもんです！」

男と女の場合。百万遍の雄弁よりも、一発のエッチの方が効果的な場合もあると、ランディは確信していた。

聞き分けのない女に、逸物を叩き込む。

ズブッ！

「ああ……！！」

心とは裏腹に、すでに肉棒の味を知ってしまったている未亡人の肉体は、嬉々として迎え入れる。

「ユリシカのオマ○コ、今日も奥までぐっちより濡れています」

「……」

啖呵を切るランディとは逆に、ユリシカは犯されても心までは開くものか、と言いたげに口を閉ざした。

いまさらな態度に、内心苦笑したランディは、女の両腕をさらに高く上げさせながら、逸物をリズムカルに叩き込む。

グチョリグチョリグチョリ……。

多くの贅肉を持つ女壺は、実に美味しそうに肉棒に絡みつく。

「んっ、くう、うん……」

必死に喘ぎ声を我慢しているユリシカに向かってランディは質問した。

「ほら、ユリシカ。鏡を見てください。おちんちんを入れて、グチョグチョ掻き混ぜられて、こんな気持ちよさそうな顔をしている女が、落飾なんてできると思いませんか？」

ランディに言われて、姿見のことを思い出したのだろう。視線を向けたユリシカははつと息を飲んだ。

そこでは喪服を半裸に脱いだ未亡人が、両腕を背後に捕らえられたまま犯されている。その姿は悲劇だ。

しかし、その女の顔は、頬を染め、目を潤ませ、必死に閉じている口元からは大量の涎が溢れてしまっている。

「いい表情ですよね。おちんちんを楽しんでいる痴女の顔だ。まさにむしゃぶりつきたくなるいい女ってやつです」

「あ、ああ……」

自ら認めなくてはならなかったのだろう。ユリシカは絶望の声を漏らす。

しかし、女には例外なくナルシストの気がある、と言われている。ユリシカも例外ではなかったようだ。

いかに認めたくなくとも、自らの痴態の映る姿見から視線を離せなくなってしまったようだ。目を吸い寄せられるように見つめている。

膣の締めりも一段とよくなったようだ。その様に苦笑しながら、気をよくしたランディは腰使いを一段速くした。

「あ、あん、ああ……奥、奥はダメ、奥をえぐつたらダメえええええッ!!!」

気高き若後家の意思とは無関係に、旬の女体はびくびくと痙攣し、膣洞もキュッキュツと締めてくる。

一突きごとに、白い双乳がプルンプルンと揺れる様がなんとも幻想的だ。

これで男が夢中にならないはずがない。ランディはガツンガツンと背後から犯し抜く。

「ああ！ ああん！ ああ！ ああん！」

すっかり我を忘れて牝獣に堕ちた義姉の尻を見下ろしてランディは嗤った。

「ユリシカにお見せできなくて残念ですけど、お尻の穴までパクパクしていますよ。いや、こんなに楽しんでもらえて光栄だな。まさにド淫乱、ド変態と呼ぶに相応しい男好きのする身体ですよね」

「ああ、そんなこと言わないで、どうして、どうして、わたしの身体はなんでこんなにエ

ツチなの？」

男に一方的に犯されながら挿<sup>や</sup>挿<sup>ゆ</sup>されて、ユリシカの目から絶望の涙が流れる。

(くう……義姉上、風情があるというか、悲劇の未亡人としての雰囲気だしすぎ)

罪悪感で胸がチクチク痛んだが、それだけに止まらない。止められない。

荒々しい抽送運動をいささかも緩めることなく腰を叩き込みながら、ユリシカの質問に答えてやった。

「ユリシカが僕のことを愛しているからでしょ。だからこそ、こうやって自分から腰を使わずにはいられない。際限のない淫婦に堕ちる」

「違う！ いや、違わないけど、違う！ わたしはあなたを愛してはいけない！ そんなことは初めからわかっていたのにつ！」

イヤイヤと首を左右に振るう喪服の美女の背骨を砕かんと欲するかのよう、ランディの荒腰は続く。

グチュグチュグチュ……。

「ほら、やつぱり僕のが好きなんだ。だからこんなに感じる！」

「いや、ダメ、感じてはダメ、んっ！ あっ、あっ、あっ、ああ」

当初は必死に感じまいと努力していたようだが、我慢すれば我慢するほどに内なる快感は高まっていく。

身体が男に犯されることに慣れてしまっている女の悲劇だ。

それどころか、背徳感がいつも以上に性感を刺激しているらしく、身体中のあらゆる箇所をビクンビクンと痙攣させている。

鏡に映る女の表情もどんどんと酷いものになっていく。

「ああ、蕩ける。身体の奥から蕩けちゃう。ダメ、なんて酷い顔をしているのわたし、ああ、なんてダメな女なの？」

鏡に映る若後家は、目は裏返して白目を晒しながら涙を流し、口元はだらしなく緩み、唾液が口角から溢れて、細い顎にまで垂れる。まさに痴女の表情だ。

「わ、わたし……なんて淫らな女なのかしら？」

「どうですか？ ちんぽ、僕のちんぽが気持ちいいんですよ」

自分が淫らな女と自覚すれば自覚するほどに、感じてしまい。同時に膣洞もよく締まった。

「男に犯されてこんな表情をする女が、落飾なんてできません。ユリシカは僕のおちんちんの奴隷です。どこにも行けません。行かせません！」

「ふぐう——！！ ひぐ……、う……」

ユリシカの喘ぎ声は切羽つまったものへと変化していき、膣洞もキュンキュンと締めくる。

「断言していい！ ユリシカは僕のおちんちんなしでは生きていけませんよ!」  
ランディの腰使いはラストスパートに入った。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/690円(税込)



全国書店で  
**好評発売中**

**男の子と女の子——**  
二つの性の間で揺れ動く  
男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!

「小説・大熊狸喜 / 挿絵・大空樹」



目覚めると  
従姉妹を護る  
美少女剣士になっていた  
【挿絵・天鬼とろり】

「小説・大熊狸喜 / 挿絵・大空樹」



全国書店で  
**好評発売中**

**凄腕退魔士の咲妃を  
牝奴隷に墮とす  
新たな敵の登場!**

「小説・蒼井村正 / 挿絵・或十せねか」



全国書店で  
**好評発売中**

**平凡な少年が女体化!  
鬼に狙われた従姉妹を護れ!!**

**既刊LINEUP**

- 仙遊字盤戦姫 / ノナガツ ①～③
- ビルグリムメイデン ①～③

全国書店で好評発売中

- 思春期なアダム ①～④
- 呪詛喰らい師【カースイーター】
- 鬼幹部メル様のカイイ証設計画!
- 借金お嬢クリス ①～④
- 無敵の姫騎士がPMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!  
来かねる場合がございます。お問い合わせは、  
メールでもお手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

**VALKYRIE**



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**



<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**  
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!